青森県総合学校教育センター　教科等教育長期研究講座報告　[2014.3]
Ｇ２－０２

小学校　社会

我が国の歴史の学習において，主体的に問題解決に向かうことができる子の育成
－学習意欲を高める素材との出会わせ方の工夫を通して－

八戸市立田面木小学校　　教諭　　野　里　　安　紀

要　　旨

本研究は，歴史の学習において，子どもたちが主体的に問題解決に向かうことができるようにするための素材との出会わせ方の工夫について，その有効性を明らかにしたものである。プレゼンテーションソフトの活用，役割演技の導入，予想の手がかりとなる資料の意図的な提示といった手だてを講じることで，子どもたちは問題意識をもち，高い学習意欲を持続しながら問題解決に向かうことができた。

キーワード：学習意欲　問題意識　役割演技　プレゼンテーションソフト　意図的な提示

Ⅰ　主題設定の理由

平成20年１月に中央教育審議会から出された，「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」には，社会科，地理歴史科，公民科の改善の基本方針について，「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視させる方向で改善を図る」と示されている。また，上記の基本方針を踏まえて，小学校社会科における改善の具体的事項には，「作業的、体験的な学習や問題解決的な学習を一層充実させることにより、学習や生活の基盤となる知識・技能を習得させる」と示されている。このように，小学校社会科では，その目標である公民的資質の基礎を養うため，実際の授業の中で，問題解決的な学習などを一層充実させることが求められている。

一方，自身のこれまでの社会科における授業実践を振り返ると，教師の発言や説明が多かったり，資料の読み取らせ方が表面的なものであったりすることが多かったように思う。その結果，本来子どもたちから引き出し得る疑問や問題意識を十分に引き出せず，教師が用意した学習問題に取り組ませることが多かった。したがって，それに対して主体的に取り組む子どもの数は限定的であった。

そこで，本研究では，子どもたちの意欲を引き出し，子どもたちが主体的に問題解決に向かうことができる授業の創造を目指して，学習意欲を高める素材との出会わせ方について，有効な手段を探っていく。そして，最終的には「社会の勉強って楽しい」と実感できる子を一人でも多くするため，この主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

我が国の歴史の学習において，素材との出会わせ方を工夫することによって，子どもたちが学習に対する意欲をもち，主体的に問題解決に向かうことができるようになることを，授業実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

我が国の歴史の学習において，以下のように素材との出会わせ方を工夫することによって，子どもたちが学習に対する意欲をもち，主体的に問題解決に向かうことができるようになるであろう。

〇プレゼンテーションソフトを活用した資料提示によって，学習意欲を高める。
〇役割演技の導入によって，社会的事象の意味を実感しながら理解させ，学習意欲を高める。
〇予想の手がかりとなる資料を意図的に提示することによって，学習意欲を高める。

Ⅳ　研究の実際とその考察

1　研究主題及び仮説に関わる基本的な考え方

(1)「主体的に問題解決に向かうことができる」について

先に述べたように，問題解決的な学習を一層充実させることが求められている中で，長谷川（2008）は社会科の学力について，問題解決的な学習過程に即した形で，以下の四つの力に分類している。

1）学ぼうとする力
定義：学ぶ対象に，興味・関心，問題意識をもち，意欲的に取り組む資質や能力である。
2）学んでいく力
定義：問題を解決していく学び方，追求力である。言わば，子どもが問題意識をもち追求していくプロセスで使う資質や能力である。
3）学んで得た力
定義：この学習で身に付けた力である。言わば，子どもが学んだ結果，習得した資質や能力である。
4）学んだことを生かし未来を切り拓く力
定義：学んだことを他の場面で生かし，自分の可能性に挑戦する力である。言わば，子どもが学んだことを活用し新たな問題を解決していくときに使う資質や能力である。

「主体的に問題解決に向かうことができる子」を育成するためには，本来であれば，子どもに上記の学力全てを付けていく必要がある。しかし，本研究ではいかにして子どもの主体的な学習を引き出していくかといった点に重点を置きたいため，上記の「学ぼうとする力」及び「学んでいく力」に絞り，「主体的に問題解決に向かう」子ども像を以下のように捉えた。

ア　「学ぼうとする力」をもった子という側面から
・態度面：学習意欲や知的好奇心をもった子
・能力面：自ら問題を発見できる子

イ　「学んでいく力」をもった子という側面から
・態度面：問題に集中して，又は問題意識を持続させながら問題解決に取り組む子
・能力面：自分なりの予想を立て，見通しをもって問題解決に取り組む子
・能力面：既習や既有の知識と関連させながら考える子

(2)「学習意欲を高める」について

子どもが主体的に問題解決に向かうためには，教師がいかにして子どもたちの学習意欲を高め，それを持続させられるかが大切である。つまり，仮に単元の導入段階で問題意識をもたせることができたとしても，それが単元全体を貫くものや発展性のあるものでなければ，子どもたちの学習意欲は徐々に低下していくだろう。だから，「学習意欲を高める」とは，単位時間の学習を通して，学習意欲を持続できるような高い問題意識をもって取り組んでいる姿を目指すことである。

(3)「素材との出会わせ方」について

学習意欲を高めるためには，その前提として，学習する社会的事象が，子どもたちの学習意欲を確実に高め，持続させることができるものでなければならない。社会科の学習において，「えっ？」「なぜ？」「どうして？」などという疑問や驚きは，主体的に問題解決に向かうための原動力である。したがって，問題意識を持続させるためには，適切な場面で，素材と子どもたちを近付ける手だてを講じることが有効であると考える。そこで，本研究では，素材と出会わせる場面を二つに分けて考えた。一つは，導入時の学習問題を設定する場面である。もう一つは，学習問題に対する予想を立てる場面である。導入時では，子どもに問題意識をもたせ，学ぼうとする力を育て，予想を立てる場面では，予想の手がかりとなるような素材を意図的に提示して，学んでいく力を育てることができるように工夫した。

2　検証授業について

(1) 小単元名「世界に歩みだした日本」

(2) 指導計画

時	題材名及びねらい	主な学習活動 「学ぼうとする力」を育てる場面(★)「学んでいく力」を育てる場面(☆)
1	**発展していく産業** 工場数の変化のきっかけを考えることを通じて，日本の工業の発展に関心をもち，学習問題を考えて表現する。	(1) 紡績工場の写真を見て，気付いたことを話し合う。 (2) グラフを見て，明治時代の産業が17年の間に大きく発展したことを読み取る。 (3) 工場の数の変化を表すグラフと主要な生産品目の推移を表すグラフとを関連付けて考え，産業の変化のきっかけを話し合う。(★) (4) 渋沢栄一や大原孫三郎の働きによって，日本の近代化が進んだことを理解する。
2 3	**条約改正を目指して** 不平等条約が日本にもたらした不利益や，条約改正に関わる陸奥宗光の願いや働きを，資料や本文から読み取ってまとめる。	(1) 日本が結んだ条約の内容について，役割演技を見て考える。(★) (2) 不平等な内容だった条約に対して政府はどうしたのか予想し，学習問題を設定する。(★) (3) 当時の年表から，条約改正に向けて日本はどのようなことを行ってきたのか調べる。(☆) (4) 教科書の本文や資料を見て，条約改正に向けた陸奥宗光の働きや願いを読み取る。(☆)

4	**中国やロシアと戦う** 二つの戦争に勝利したことが，日本の世界における地位の向上につながったことを考えノートなどに表現する。	(1) 二つの戦争の風刺画を見て，朝鮮をめぐる日本，中国，ロシアの関係を話し合う。(★) (2) 二つの戦争の結果を予想する。(★) (3) 教科書の本文や資料を見て，二つの戦争の様子や結果を調べる。(☆) (4) 二つの戦争の結果と日本の世界における地位の向上を考え，表現する。(☆)
5	**朝鮮を植民地にする** 日本が朝鮮を植民地にして朝鮮の人々の誇りを傷つけたこと，勢力を伸ばして条約改正を果たし欧米諸国と対等な地位を築いたことを理解する。	(1) 日露戦争に勝利した日本は，朝鮮をどのように扱ったのか予想する。(★) (2) 教科書の本文や資料を見て，日本が朝鮮の人々にどのようなことをしたのか調べる。(☆) (3) 日本が朝鮮の人々にしたことに対して，朝鮮の人々はどのように思ったのかを考える。(☆) (4) 戦争の勝利によって，日本が国際的な地位を高め，不平等条約を改正したことを理解する。
6	**国際社会で日本人が活躍する** 医学などの分野で国際的に活躍した日本人の存在が国力の充実や国際的地位の向上につながったことを考えノートなどに表現する。	(1) 野口英世，北里柴三郎，志賀潔などが，医学の分野で国際的に活躍したことを知る。 (2) 調べる人物を決め，活躍した年代，業績，エピソードなどを教科書や他の資料を使ってまとめる。(☆) (3) 調べた人物についてグループの中で発表し，その人物の果たした役割や功績を話し合う。
7	**生活や社会の変化** 産業の発展が，様々な面で人々の生活や社会に変化をもたらしたことを理解する。	(1) 産業の発展によって，人々の生活が変化し，便利になってきたことを知る。 (2) 教科書の本文や資料を見て，生活の変化によって様々な問題も起こり，民主主義への意識が高まってきたことを読み取る。(☆) (3) 産業の発展によって，人々の生活や社会に変化をもたらしたことをノートにまとめる。
8	**学習のまとめ** 日本の国力の充実や国際的な地位の向上，それらに伴う社会の変化を，人物の働きや思いと関連付け，適切に表現する。	(1) 陸奥宗光，平塚らいてう，野口英世について，本単元で学んだ「ことば」を参考にして，インタビューしたい内容や答えを考え，吹き出しに書く。(☆) (2) ３人のインタビューについて書いたことを発表し合う。 (3) 本単元で学習した人物の中から選び，インタビュー内容やその答えを吹き出しに書く。
9	**100年前の東京駅―東京停車場之図** 100年前の東京駅の絵図を現代の東京駅と比べながら読み取り，興味・関心をもって話し合う。	(1) 「東京駅停車場之図」が描かれた頃を年表で調べる。 (2) 「東京駅停車場之図」を見て気付いたことを話し合う。 (3) 100年前の社会の様子について話し合う。

(3) 検証方法

・小単元前後に社会科の学習に対する意識調査を実施し，どのように変容したか考察する。
・各時間の終了時に，その時間の学習についての自己評価を行わせ，数値の推移を分析する。
・子どもが記述した内容（発問に対する自分の考え，学習問題に対する予想・まとめ）を考察する。

３　研究の実際

(1) プレゼンテーションソフトを活用した資料提示

本小単元では，授業で提示する絵図，グラフなどの資料を，全てプレゼンテーションソフトで拡大提示した。そのねらいは，子どもたちの資料への意識を集中させるとともに，拡大することで子どもたちの気付きを促し，学習意欲を高めることにある。同様のねらいで，これまで，実物投影機やデジタルカメラを使用したことがあったが，資料を事前に準備しておくことで，テンポよく，かつ必要に応じて繰り返し提示できるという点で他の機器よりも優れていると考えた。

(2) 役割演技の導入（第２時）

本時のねらいは，日本が欧米諸国と幕末に結んだ修好通商条約の内容が不平等であり，条約締結後に発足した明治政府にとって，新しい国づくりを進める上で大きな問題となっていたことを理解させることである。そのためには，条約内容が不平等であるとともに，約30年もの間改正されなかったのはなぜかという問題意識を子どもたちがもてるようにする必要があると考えた。しかし，子どもたちにとって，不平等条約の内容，特に関税自主権が認められていないことについては，理解することが難しいことが予想された。そこで，子どもたちに当時の人々の立場を実感をもって理解させるため，役割演技を導入した。

ア　関税自主権が認められていないことを理解させるための役割演技
　留意点：役割演技を行う前に，横浜の外国商館の様子の絵図を拡大提示し，開国後外国の商人がやって来て，外国の商品を売るようになってきたことをおさえた。

イ　領事裁判権を認めていることを理解させるための役割演技
　留意点：ここでの役割演技を始める前に，教科書のノルマントン号事件の風刺画を拡大提示して，事件の概要と，事件後，イギリス人船長の裁判が行われたことを説明した。

(3) 予想の手がかりとなる資料の意図的な提示（第３時及び第４時）

第３時のねらいは，前時の学習を受けて，不平等条約の改正を目指して，日本がどのようなことをしたのか，また，陸奥宗光の努力によって条約の一部改正に成功したことを知ることである。条約改正に至るまでの日本の取り組みを調べる方法には，年表を見ることが多いと思われる。しかし，教科書の年表をただ見せても，表面的な読み取りになることが予想された。そこで，本時では，予想の段階で条約改正に関わる年表を拡大提示し，「年表の中で，条約改正に関係する出来事はどれだと思うか」と発問し，未知の

社会的事象の意味を考えさせた。こうすることによって，子どもたちが根拠をもって予想を立てることができると考えた。

第４時のねらいは，日清・日露の二つの戦争の勝利が，日本の世界における地位の向上につながったのだと気付かせることである。そのためには，当時の中国とロシアは大国であり，その二国に勝利したことの驚きを実感させる必要があると考えた。そこで，日清，日露戦争の風刺画を拡大提示した後，勝敗を予想させてから調べる活動に入るようにした。ただし，教科書に掲載されているのは，日清戦争の風刺画のみであり，これだけでは不十分だと考え，日露戦争の風刺画も提示した。この資料は，国力の大きさが人物の大きさに象徴されており，当時の各国の力関係をつかみやすいと考えた。

４　検証

(1) 意識調査の結果の考察

本研究の出発点は，「社会の勉強って楽しい」と思う子を増やしたいという願いであった。そこで，各時間の学習が楽しかったかどうかを調査したのが，図１である。これを見ると，４と３を合わせた割合が全ての時間において90％を超えている。特に，第２時では，73.9％の子どもたちがとても楽しかったと答えている。これは，役割演技の実施が大きく影響していると考えられる。また，本小単元の学習の前後に，社会科の学習に対する気持ちについて調査した。その結果が表１である。

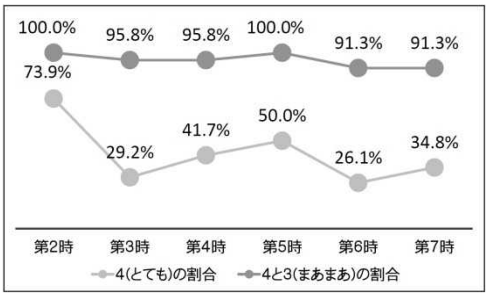

表１　社会科の学習に対する気持ちの変化

	A児	B児	C児	D児	E児	F児	G児	H児	I児	J児	K児	L児	M児	N児	O児	P児	Q児	R児	S児	T児	U児	V児	W児	X児	平均
小単元前※1	4	2	4	4	3	4	4	4	1	4	2	4	3	3	3	1	2	4	3	4	3	1	2	3	3.0
小単元後※2	↗	→	↑	→	↑	↗	↗	↑	→	→	→	↗	→	↗	↗	↓	→	→	→	↗	↗	↗	→	↑	
※3	4.5	2	5	4	4	4.5	4.5	5	1	4	2	4.5	3	3.5	3.5	0	2	4	3	4.5	3.5	1.5	2	4	3.3

※１：小単元前意識調査は，「社会科は好きですか」という質問に対する答え
　4：好き　**3**：どちらかと言えば好き　**2**：どちらかと言えばきらい　**1**：きらい

※２：小単元後意識調査は，「これまでに学習してきた単元の学習と比べて，社会科の授業に対する気持ちは，どのように変わりましたか」という質問に対する答
　↑：前よりも好きになった　↗：どちらかと言えば好きになった　→：あまり変わらない　↓：前よりもきらいになった

※３：小単元後の数値は，小単元前と後を比較して，意識の変化を数値化した値
　↑：プラス１　↗：プラス0.5　→：増減なし　↓：マイナス１

約半数の13名が，社会科が好きになったと答え，平均値は3.0から3.3へと上昇した。その一方で，小単元前，社会科がきらいだった子どもで，小単元後，３以上に上昇した子が一人もいない。よって，以前から社会が苦手だった子どもの変容はこのデータからは見ることができない。しかし，第２時の授業を行った日の日記に，次のように書いてきた子がいた。

> **題「社会久しぶりに楽しかったあ」**
> 今日の社会が非常に楽しかったです。理由は，先生の説明もいつもよりわかりやすかったし，〇〇さんや△△さんによる劇もおもしろかったし，授業の内容がばりばりわかったからです。久しぶりに社会の授業がわかっておもしろかったです。

この日記を書いたのは，表１におけるＰ児である。Ｐ児の表１における値は，小単元の学習前：１，小単元の学習後：０となっている。この値とＰ児の日記の内容から，Ｐ児の社会科に対する意識は必ずしも低いわけではないと考えられる。むしろ，第２時で講じた役割演技という手だては，社会科の学習の楽しさを実感させ，学ぼうとする力を育成するのに有効であったと言える。

(2) 自己評価の数値の分析

まず，本小単元の学習の各時間において，疑問に思うことをどの程度もつことができたかを調査した。その結果が図２である。これを見ると，第２時及び第３時の数値が高い。これは，問題意識をもたせるための資料提示や学習活動の工夫を取り入れたためだと考えられる。

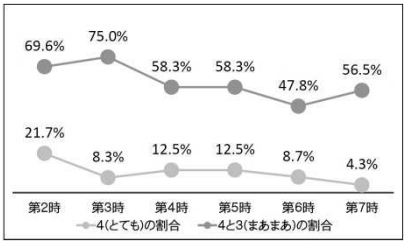

図２　今日の授業の中で「なぜだろう」「どうしてだろう」と思うことがどのくらいあったか

表２　これまでの社会科の授業で，次の資料を見て「はてな」と思うことがどのくらいあったか

	写真や絵から	年表から	グラフや図から
4の人数(%)	２名(8.3)	２名(8.3)	２名(8.3)
3，4の人数(%)	８名(33.3)	６名(25.0)	７名(29.1)
4段階評価の平均	２．１	１．９	２．０

4:いつもある　3:ときどきある　2:あまりない　1:ほとんどない

なお，本小単元の学習前に同様の内容について調査した結果は表２の通りである。質問の仕方は異なる

が，図２の数値と比較しても，プレゼンテーションソフトを活用した資料提示及び役割演技の導入といった手だては，子どもが自ら問題を発見させることに効果があったと言える。

次に，各時間において，学習意欲が高まったか，また，小単元を通して学習意欲が持続したかどうかを測るために調査した結果が図３，図４である。図３の「やる気」を学習意欲と捉えると，第４時以降，３，４の自己評価が90％以上であることから，子どもたちの学習意欲は高いレベルを維持したまま推移したと言える。また，本小単元の授業では，資料の提示→気付いたことの発表→学習問題(本時のめあて)の設定→予想→調べる→調べたことの発表→本時のまとめという流れを毎時間意識して学習を展開してきた。その結果，各時間の終末では，めあてに対応したまとめを子どもたちが自分なりに書けるようになってきた。図４の数値も，そうした実態を反映していると言える。以上から，資料提示の工夫によって，学習のめあてがより子どもたちの問題意識に即したものとなり，意欲を持続させて問題解決に取り組む力がついてきたと言える。

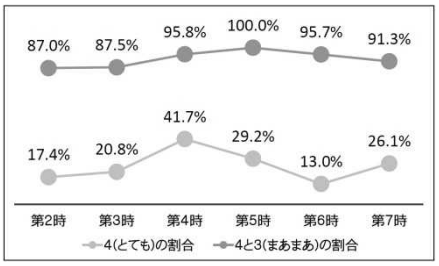

図３　今日のめあてに向かって，どのくらいやる気をもって取り組んだか

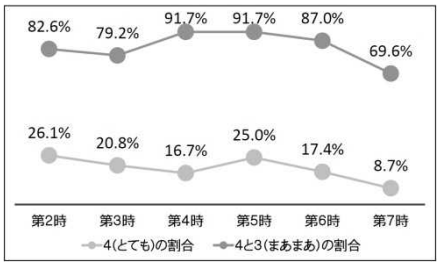

図４　先生の問いに対して，自分の考えをもつことができたか

(3) 子どもが記述した内容の考察

第２時の役割演技後，条約の内容についてノートに書かせた子どもたちの感想は，以下の通りである。

> ●日本にとって不利になる条約なのになんで日本は結んだんだろうと思った。●二つともアメリカの方が得をするような感じで不平等だと思う。●条約のせいで，日本で罪をおかしても無罪になったり，勝手に行動するのが許されたりするから，条約を結んだ幕府は何をしていたのかなあと思う。●輸入品は安いと言っていて，それに関税をかけられないことはかわいそうだなあと思う。あと，外国人が日本で悪いことをしても，外国の裁判所で裁判を受けることができるのはずるいなあと思う。●なぜこのような日本があっとう的に不利な条約を幕府は結んでしまったのか。●関税自主権が認められていないということは，日本の産業が育たないということだから，いやだと思う。●条約を結ばなければよかったのに。でも外国の武器の強さにおどろいたから仕方のないことだと思う。(抜粋)

役割演技をする子どもは意図的に指名し，その場で一度内容を黙読させた後，役割を示す名札を付けて行わせた。演じた子どもは，身振り手振りはないものの，その役になりきって演じていた。演技を見ていた子どもたちも集中して見ていた。

記述内容のように，大半の子どもは，条約の内容が不平等であるということに気付いた。加えて，これまでは自分の考えを書けなかった子どもも，すぐに書き始める様子が見られた。また，「外国の武器の強さにおどろいたから仕方のないことだ」という内容が見られた。これは，条約が結ばれた当時の状況に身を置くとともに，既習の知識と関連させながら考えたからこそ書ける内容であると言える。

以上のことから，条約締結の時間的経緯をおさえた上で役割演技を行ったことが，子どもたちに問題意識をもたせ，学習意欲を高めることにつながったと言える。

第３時の終末で「条約改正に向けて，日本はどのようなことをしてきたのだろうか」という学習問題に対して子どもたちが書いたまとめの内容を以下に示す。

> ●不平等な条約を改正するために，岩倉使節団を外国に送ったり，外国人を鹿鳴館に呼んだりしてアピールした結果，1894年に陸奥宗光がイギリスとの条約を一部改正することに成功した。●外国に使節団を送って，条約改正の交渉をしたり，鹿鳴館を作ったりして外国人を招き近代化をアピールして，イギリスとの条約の一部を改正することができた。●岩倉使節団や陸奥宗光が外国に交渉しに行ったことなどのおかげで条約は一部改正された。イギリスがロシアと対立していたことで，日本に協力を求めたからという事情もある。●政府は，アメリカ，イギリス，フランス，オランダに条約を改正してほしいとたのんだが無駄だった。でも，1894年にイギリスとの条約の一部を改正することができた。しかし，外国からの輸入品に自由に関税をかけることは許されなかった。●岩倉使節団が条約の改正を求めたが受け入れられず，その後，鹿鳴館をつくり，外国に好印象を与えようとした。ロシアとイギリスが戦う際，日本に協力を求め，その代わりに条約を一部改正することに成功した。●日本は，使節を送るなどして条約の改正に取り組んで，イギリスと条約の一部を改正することができた。●岩倉使節団を送ったり，鹿鳴館を建てたりしたが，ロシアと対立していたイギリスとやっと1894年に条約の一部を改正することができた。その後少しずつ条約を変えていった。（抜粋）

これまでの授業でも，学習のまとめを子ども自身の言葉で書かせてきたが，自力で書けない子が大勢いて，やむを得ず教師が板書したものを写させることが多かった。しかし，本時では，内容に多少の不足はある文章もあるものの，全ての子どもが，調べたことを基に，自分の言葉でまとめを書くことができた。

また，提示した年表中の事象が，全て日本の条約改正に関係しているのだが，そのことを伏せて予想させることで，子どもたちは，何らかの根拠に基づいて判断せざるを得なくなった。特に，鹿鳴館について

は，教科書での記述も少ないためか，日本の近代化を諸外国にアピールし条約改正への足掛かりにしようとしていたと考える子どもはいなかった。予想の手がかりとなる資料を与え，予想外の事実を伝えることで，学習意欲が高まり，結果として条約改正へ向けての取り組みについて理解させることができた。

本小単元の学習終了後に，学習の感想を自由に書かせたところ，内容は以下の通りであった。

●かんたんにわかって楽しかった。●前よりもわかりやすく，楽しく勉強ができるのでよいと思います。●関税自主権や領事裁判権を劇でわかりやすくやっていて，よかったと思います。●劇をやればわかりやすいし，楽しいと思うからもっとやりたいです。●人の写真を黒板に写して名前を覚えるのがいいなあと思いました。また，習った人をもう少しくわしく調べてみたいなあと思いました。●明治に活躍した野口英世や夏目漱石など少ししか勉強していないので，もっと知りたかった。●前よりもおもしろく，わかりやすかったから，よくわかるときが多くなり，少し社会が好きになった。（抜粋）

「かんたんにわかった」「前よりもわかりやすい」「劇でわかりやすく」という感想があり，本単元での指導の工夫は，子どもたちにとって一定の効果あったと言える。そして，「社会が楽しくなった」「少し社会が好きになった」という感想があったことが，この研究を行ってきて一番の成果だと感じている。

Ⅴ　研究のまとめ

本小単元では，扱った全ての資料を，プレゼンテーションソフトで拡大提示した。これによって，子どもたちの意識が資料に集中し，学習意欲を高めることができた。さらに，資料を切り替える時間が短縮され，子どもたちが調べたり考えたりする時間をこれまでよりも多く確保することができた。

また，役割演技の導入によって，問題意識をもたせ，意欲的に問題解決に取り組もうとする「学ぼうとする力」の育成につなげることができた。特に，関税自主権が認められていないことの不平等さを，当時の日本の生産者の立場に立って理解させることができたのは大きな成果であった。

さらに，予想の手がかりとなる資料を意図的に提示することで，根拠をもって予想を立てさせることができた。第４時で日露戦争の風刺画を見せて勝敗を予想させた際は，日本が負けたと予想していた子たちから驚きの声が上がった。同時に，子どもたちの中に「なぜ日本は二つの戦争に勝てたのだろうか」という問題意識が生まれ，その後の調べる活動で，意欲的に教科書を読み込んでいる様子がうかがえた。

「日本が結んだ条約は不平等だ」という問題意識をもった子どもたちは，「その後日本はどうしたのだろうか」という小単元全体を貫く学習問題を設定し，各時間の学習問題に対する予想を立てることができた。ここまでくれば，教師は「みんなの考えた予想が正しいか確かめてみよう」と声をかけるだけでよく，子どもたちは，文字通り主体的に問題解決に向かっていた。以上から，本研究で講じた手だては，学習意欲を高め，主体的に問題解決に向かう子を育成するのに有効であったと言える。

Ⅵ　今後の課題

役割演技について，全ての授業にそれを取り入れることは，扱う題材の性質上難しい。しかし，役割演技の有効性が明らかになったので，今後，他の単元において，役割演技化できる場面を考えていきたい。ただし，役割演技という形式自体のおもしろさにばかりとらわれて，本来のねらいからそれないように留意しなければならないと考える。

プレゼンテーションソフトを活用して資料を提示することは，他の単元や学年の指導においても効果的に活用できると考える。また，子どもの学習意欲を高めるためには，導入場面に限らず，予想させる場面なども含めて，どのタイミングで資料を提示するかが極めて重要であることを改めて実感した。

＜引用文献＞
１　中央教育審議会　2008　「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」，pp. 79-80
２　長谷川康男　2008　『授業づくりと基礎スキル』，pp. 13-14，東洋館出版社

＜参考文献＞
北俊夫　2004　『社会科学習問題づくりのアイデア』　明治図書
北俊夫　2012　『なぜ子どもに社会科を学ばせるのか』　文渓堂
長谷川康男　2006　『子どもが社会科で問題意識をもつ１０のポイント』　学事出版
文部科学省　2008　『小学校学習指導要領解説　社会編（平成20年８月）』